

「シオニズムとワタン」研究会

プログラム

・趣旨説明

岡真理（京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授）

・報告 1

菅野和也ソロモン（京都大学 人間・環境学研究科修士課程）

「シオンの悲嘆者」運動：中世ユダヤ教における「イスラエルの地」と「捕囚の地」を巡る力学

・報告 2

細見和之（京都大学大学院 人間・環境学研究科、総合人間学部 教授）

カツェネルソンの「シオニズム」

・質疑応答

●報告 1

「シオンの悲嘆者」運動

—中世ユダヤ教における「イスラエルの地」と「捕囚の地」を巡る力学—

発表者：菅野和也ソロモン

「シオンの悲嘆者」運動は、10世紀から11世紀にカライ派ユダヤ教の中でおこった運動であり、エルサレムを希求することの重要性を主張した。

中世ユダヤ教ではバビロニアにあったイエシヴァ（神学校）が中心地となり、そこでラビたちによってタルムード（ラビたちが口伝えで継承してきた聖書解釈をまとめたもの）が編纂された。タルムードは聖書学習に欠かせないものとされ、その権威を背景に、バビロニアのラビたちは権力を拡大した。このラビ・ユダヤ教の最大の競争相手であったのが、カライ派ユダヤ教である。カライ派の賢者たちは、タルムードの学習に費やされる労力が学習者たちを聖書原典から引き離していると批判。個々人が聖書を探究することを勧め、その主張はそれに賛同する者たちをラビ・ユダヤ教の権威構造から解放した。

ラビ・ユダヤ教においては、申命記30章に神がガルート（捕囚）からイスラエルを解放し、イスラエルを集め、約束の地に住まわせることを書かれていることを根拠に、神が戻してくれるまでバビロニアやその他の地でガルートに留まるとされた。しかしカライ派ユダヤ教徒たちは、ラビたちのこうしたガルート理解をその権威に甘んじてバビロニアに居座ることを選んでいるのだと考え、バビロニアを離れ、エルサレムに移住することで神の贖いを実現しようと唱え始めた。そうしておこったのが「シオンの悲嘆者」運動であった。運動においては、捕囚からの救済を引き起こすためのプロセスとして悔い改め（神に立ち返ること）が提唱され、それは、シオンのために嘆くこと、そしてパレスチナに移住することだとされた。

またカライ派のユダヤ教徒イエフェット・ベン・エリーは聖書註解のなかで、救済後のイスラエルの地では、すべての離散しているものが集められて捕囚は終結し、王国が確立され、祭司が復権すると考えを書き残している。

（文責 西道）

●報告 2

イツハク・カツェネルソンの「シオニズム」

発表者：細見和之

発表者が、専門とする研究の傍らで20年以上に渡って追いかけてきたのが、イツハク・カツェネルソンである。今回の発表は、カツェネルソンの人物紹介からはじまり、子供向けに書かれた短編集に浮かび上がる「シオニズム」的描写に焦点が当てられた。そしてホロコーストの前後で、彼の作風がいかに変化したのかが解説された。

ポーランドで活躍したユダヤ系の戯曲家であり、詩人、作家、批評家であるカツェネルソンは、1944年にアウシュヴィッツで殺される直前まで、ヘブライ語とイディッシュ語で様々な作品を残している。第2次世界大戦による動乱で、ポーランドから、ワルシャワ・ゲットー、ヴィッテル収容所（仏）を経てアウシュヴィッツに至る。カツェネルソンは、ポーランドのウッチにヘブライ語学校を設立し、ヘブライ語の復興に尽力していたが、ワルシャワ・ゲットーに移ったあとは、イディッシュ語が主な使用言語になる。当時のユダヤ人たちが経験していた惨劇は彼の使用言語だけでなく、作風にも影響をもたらしていたことがうかがえる。ワルシャワ・ゲットーに移ってからは、ワルシャワからトレ布林カ絶滅収容所への移送を主題とした『滅ぼされたユダヤの民の歌』や、妻と二人の息子がトレ布林カに奪われたことを主題とした『1942年8月14日—私の大いなる不幸の日』など、ホロコーストの悲劇を反映したものが多くなる。

他方で、発表のなかで紹介された子供向けの短編集『夢においても、目覚めにおいても』は、ヘブライ語で書かれ、そのほとんどがユダヤ教の風習をモチーフにしたものである。物語のなかには「イスラエルの地」「私たちの地」「祖先の地」「憧れの地」といった言葉で、遠い太陽が降り注ぐ地への憧憬が表現されている。物語におけるシオニズム的描写は、素朴で、観念的なものであった。作品の成立年代は不明であるが、ユーモラスな作風から、ゲットー期以前に書き継がれたものであると考えられる。

使用言語や、作風の変遷は、ホロコーストの災厄を経験したユダヤ人たちの心情の変化を映し出すものであるとも言える。ヘブライ語の復興活動などに見られるシオニズム的思想を持っていたカツェネルソンは、イディッシュ語でホロコーストの悲惨さを伝える作品を残すようになった。このことは苦難に直面したユダヤ系民族にとってのワタン（homeland）が、遠いイスラエルの地ではなく、シナゴークやユダヤ共同体といったイディッシュ語コミュニティにあったことを示唆しているとも言える。

カツェネルソンや、当時のユダヤ人指導者たちにとって、ヨーロッパ大陸のユダヤ人の絶滅は、全民族の終焉として捉えられていたのであった。『滅ぼされたユダヤの民の歌』は「何としたことだろう、もう誰もいないのだ…かつては一つの民族があった、それがもうない…一つの民族があった、確かにあった、それが…もうない！」という言葉とともに終わりに向かう。（文責 ソロモン）

★カツェネルソンに関しては、以下の作品を日本語で読むことができます。

『滅ぼされたユダヤの民の歌』細見和之ほか共訳、みすず書房、1999年。

「シオニズムとワタン」研究会

『ワルシャワ・ゲッター詩集』細見和之訳、未知谷、2012年。

●質疑応答-----

報告1では、ガルトを「離散」ではなく「捕囚」とした理由や、エルサレムへ自ら帰還することは「神による救済」に反するのではないかということについて、また、現代シオニズムと「シオンの悲嘆者」運動の関連性について質問がなされた。

報告2の質疑応答では、イツハク・カツネルソンの従兄弟のバル・カツェネルソンが話題に上り、また、カツネルソンがホロコースト以降へブライ語ではなくイディッシュ語で作品を多く残したことの意味、そして、観念的ではあれシオニズム作品を書いていたカツェネルソンがホロコーストのさなかでワタン／ホームランドをどのようなものとして捉えたのかなどが議論された。 (文責 西道)
